

僧偶絲櫻をさして垂絲と云しより、習而不察、不知絲櫻は軟條にして非垂枝、據女南圃史、地棠花の條に、垂絲海棠似棠棣花とあるときは、今の櫻中の江戸桐谷伊勢等をさすこと分明なり、畢竟今の櫻は海棠の一種にして非櫻、そは即ち櫻桃にして、今のゆすら梅なり、垂枝と類自別なり、又按に垂枝海棠二種あり、同名別物なり、一種は古來所稱絲櫻、一種は今のさくら、是なり、按に行厨集花木門に垂枝海棠の條曰、吐絲向下、花似地棠花とあり、今のさくら皆莖長下に垂吐絲は枝の末たる、事にあらず、海棠譜及圓機活法にいへる垂絲海棠とは今の絲櫻なり、行厨集にいへる諸櫻のことたること分明なり、近世大徳寺の覺印問之唐僧曰、垂絲海棠は諸櫻の通稱なり、重葉の垂絲は八重櫻の事なりと、唐僧の話なりといへり、是行厨集の説と合せり、敬義の櫻の辨にも、誤て以櫻桃日本の櫻とせり、不知櫻即櫻花而本より非佐久良櫻の名日本所私名而非漢土之櫻也、

〔義演准后日記〕慶長十年二月廿五日、秀頼公へ伊勢櫻一枝、初藤進上之馬場并中谷ノ花最中、今夕見物驚目了、歸路ニ苜寺絲櫻見物、泉水ノ伊勢櫻三分一咲、廿七日、寺澤志摩守、龍藏寺信濃守、東條紀伊入道爲見物來、

熊谷櫻

〔大和本草十二〕櫻〇中

熊谷櫻。高サ尺ニ不過シテ花サク、長シテ四五尺ニ過ズ、彼岸櫻ニ先立テ八重ノ好花ヒラク、枝ノカタチハ櫻ニ似テ彼岸櫻ニハ似ズ、櫻ノサキガケ也、別種ナリ、花色白クシテ少紅ヲ帶タリ、

〔櫻品〕熊谷櫻

彼岸櫻の八重也、開事最早し、故に名花の先登といふ義なり、昔源平攝州一谷の合戦、熊谷次郎直實爲先登、以て此に比す、花小にして色赤し、或曰千葉のものあり、千葉難波櫻に似たり、此非熊谷、乃藝花家に所謂楊貴妃也、似緋櫻而小也、又單瓣大輪、似芝山櫻、而色帶紅、暈者呼熊谷、是亦非也、此